

支援動詞構文の分析：コーパスに基づく構文理論的アプローチ

藤井聖子* 上垣渉#

*東京大学大学院 総合文化研究科 言語情報科学専攻 #同教養学部 言語情報科学分科

1. はじめに

本稿では、支援構文 (Support Construction) の一種である支援動詞構文 (Support Verb Construction) という構文概念を用いて、特定の動詞と特定の名詞との語彙的結びつきを分析・記述する枠組み・アプローチを論じる。より一般的な問題としては、構文という構成単位において、その構文に参加する語彙と語彙との統語的・意味的關係、さらにコロケーションを捉える手法・枠組みの意義を考察する。

2. 支援動詞構文：定義と特徴

構文理論 (Fillmore 2002, etc.) および FrameNet (<http://framenet.icsi.berkeley.edu/>) においては、支援構文一般を捉える枠組みを提示しているが、本稿では、支援動詞 (Support Verb) とその直接目的語である事象名詞 (句) とが構成する、支援動詞構文 (Support Verb Construction: SVC) を考察する (例: (1)a. b. (2)a. b.)。

(1) a. The team made an attack on the enemy.

b. チームが敵に攻撃をかけた。

(2) a. John made a reservation at the hotel.

b. ホテルの予約をとった。

2.1 定義

支援動詞構文の言語間比較を可能にする広義の定義を、以下とする: (i) 事象名詞が本動詞の直接目的語となっており、(ii) その事象名詞が項構造をもち、(iii) その事象名詞と本動詞とが項を共有する、具体的には (iv) 本動詞の統語上の主語が、事象名詞の意味上の動作主 (経験者) と一致し、主語コントロール構造を形成する、構文である。

本稿では、上記(i)~(iv)を満たす構文を「広義の支援動詞構文」(又は「広義のコントロール抽象構文」)、(i)~(iv)に加え次項 2.2. に示す(v)も満たす構文を「狭義の支援動詞構文」(又は「典型的な支援動詞構文」)と指示する。

2.2 支援動詞構文に参加する事象名詞の特徴

この広義の定義に則った支援動詞構文の中で、上垣・藤井(2008)では、参加する事象名詞が「する」と直接結合して動詞を作る事象動名詞(Verbal Noun)に限定して、分析を行った。[例: 「攻撃」をかける; 「指揮」をとる; 「予約」をとる] これらが SVC に参加する代表的な事象名詞である。

しかし、支援動詞構文には、連用形名詞も頻繁に参加し、「する」と必ずしも(助詞「を」無しで直接)結合しない連用形名詞 [例: 「疑い」をかける; 「願い」をかける; 「遅れ」をとる等] も参加する。さらに、言語間対照 (および想起される意味フレーム) を念頭に支援動詞構文を広く捉えて語彙記述をする場合は、「噂」(噂<を>する)のみでなく、「噂話」(噂話をする)や「苦情」(苦情をいう)などの事象名詞が参加する構文も SVC の射程に入れる必要がある。

厳密な支援動詞構文の捉え方においては、前出の定義条件に加え、(v) 動詞ではなく、参加する事象名詞が、第一義的な意味フレーム想起要素 (frame-bearing element) となる、という重要な特徴が加わる。この特質を「項共有」の観点から述べると、先に定義要素 (iii) (iv) で挙げた事象名詞と本動詞との項共有現象が、事象名詞からの要請で生じているといえる。この点が、従来から一般的にコントロール動詞と捉えられてきた動詞群 (‘try’ ‘試みる’ など) との相違点の一つである。前述のとおり、(i)~(iv)に加え) この(v)の定義条件も満たす構文が、典型的な支援動詞構文である。

2.3 支援動詞構文に参加する本動詞の特徴

SVC に参加する本動詞 (狭義のコントロール動詞以外) は、第一義的な意味フレーム想起要素 (frame-bearing element: FBE) とならず、FBE である事象名詞を「支持」(‘support’) する役割を果たす。その支持機能としては、テンス・アスペクトを呈す

る統語的主要部となるのみで意味的寄与は極めて軽微な、従来軽動詞 (light verb) として扱われてきた動詞 (日本語での「する」; 英語での make など) の場合から、事象名詞で表される事態に付加的意味を寄与するものまで、さまざまである。軽動詞に限らず、この幅広い動詞群を統括的に捉えるための枠組みとして、支援動詞、および、支援動詞構文の概念が構文理論で採用されている (Fillmore 2002)。

2.4 統語的主要部と意味的主要部との齟齬

2.2. および 2.3. でみた特徴は、換言すると、統語的主要部と意味的主要部との齟齬がある構文であるといえる。[[名詞+を] +動詞] という極めて一般的統語構造 (抽象レベルでの構文) をしており、動詞が統語的主要部でありながらも、名詞が意味的主要部として意味フレームを想起する。

2.5 イディオム性

一般的統語構造をしておりながら、その本動詞と名詞との組み合わせは自由ではなく、選別性を示す。

さらに、上垣・藤井 (2008) で提示するとおり、分裂文化、主題化、受動化、関係節化などによって、SVC の名詞句と動詞とを統語的に分離させると容認度が落ちたり動詞の意味解釈が変化したりする、という統語的固定性を呈する。(3) のような質問文が不自然であることから同様の特質が分かる：

(3) # What did the team make on the enemy?

チームは敵に何をかけたの？

3. 支援動詞構文の種類とその周辺

以上のような特質を基準にし、その特質の現れ方のバリエーションに基づき、本動詞とその目的語となる名詞 (句) との組み合わせが構成する支援動詞構文 (広義のコントロール構文) を、下記のような類型でまとめることができる。ここに挙げる構文タイプの構文間の関係と包含関係に関しては、本稿 4 節の図 1 を参照されたい。

3.1 イディオム性の高い支援動詞構文

2.1.-2.2 の定義要素 (i) ~ (v) をすべて満たす、支援動詞構文の中心的構文。「項共有」という基本的な定義 (iii) において、広義の一般的 コントロール抽象構

文の一種と捉えられる。「とる」「かける」「きる」「はらう」「おくる」「うける」など、通常の用法では事象名詞ではなく具体物を表す名詞句を目的語にとり合成的に用いられる動詞が参与する構文。支援動詞構文に参与した場合、通常用法と異なり、意味的主要部性を失い支持的機能を果たす。通常用法とは異なる意味用法で支持動詞として用いられるが、両者の用法は、一貫した意味が構文環境において変異する具体・抽象 (比喩) バリエーションとして捉えられる。語彙記述において、支援動詞構文に参与する両者の選別性を記述する必要がある。

支援動詞	支援動詞構文を構築する事象名詞
とる	連絡、確認、予約、行動、指揮、メモ・ノート・記録、睡眠、仮眠、眠り、許可、休憩、休暇、休み、注文、決議、多数決、手続き、見積もり、裏付け、コミュニケーション、リーダーシップ、イニシアティブ、コンタクト、バックアップ、等
かける	攻撃、制限、規制、制御、召集、検索、電話、負担、迷惑、縛り、プレッシャー、望み、誘い、疑い、磨き、歯止め、等

3.2 規則性が高くイディオム性も合わせもつ支援動詞構文

3.2.1 軽動詞が参与する構文

従来、(日本語においても他の多くの言語においても) 広範に分析・記述が展開してきた軽動詞 (日本語の「する」; 英語の make など) を伴う構文では、動詞の構文への意味的寄与が最小であり軽微である。

日本語においては、軽動詞「する」の特殊性により、3.1 の構文タイプとの区別が明確であるが、英語では、明確な境界線が引けるわけではない。英語の語彙情報電子資源である FrameNet における語彙記述においても、両者の区別の必然性は認められておらず、区別が明示されていない。また、言語間でその区別が保持されるわけでもない。

3.2.2 狭義のコントロール動詞が参与する構文

一般的にコントロール動詞と捉えられてきた動詞群 (‘try’ ‘試みる’ ‘等’) が参与する、動詞と名詞句とが項を共有する主語コントロール構文。

その「項共有」現象は動詞の意味素性からの要請でもあり、2.2.の5つ目の条件 (v) は満たさない。動詞自体も意味フレーム想起要素であり、統語的主要部と意味的主要素との齟齬という特質ももたず、意味的合成性の強い構文である。

3.1.のイディオム性の高い支援動詞構文と異なり、3.2.1.および 3.2.2 は、規則性の高い構文であり、規則性とイディオム性とを合わせ持つ。(参与する事象名詞の特質も考慮した、本構文の規則性とイディオム性についての具体的分析に関しては、上垣・藤井 *ibid.* を参照されたい。)

3.3 動詞の構文への意味寄与度のより強い支援動詞構文

以上のコントロール・支援動詞構文の中で、3.1のイディオム性の高い支援動詞構文の延長線上に、さらに様々な動詞と事象名詞との組み合わせによる拡張支援動詞構文を考察することも重要になる。(言語内の語彙記述においても有益であるとともに、言語間対照において必要となる。)

一例として、「伝達」の意味フレームでの支援動詞構文を考察しよう。まず、英語では明らかに典型的な支援動詞構文が多く認められる。以下は Statement フレームにおける‘complaint’という事象名詞を伴う場合である (Ruppenhofer *et al.* 2002)。

支援動詞	事象名詞
make	complaint (claim, 他、省略)
express, lodge, register, submit, voice	complaint
face, get	complaint
have	complaint

事象名詞‘complaint’がFBEとなる支援動詞構文のうち、‘make a complaint’は、軽動詞構文として従来から分析・記述されてきたものである。が、例えば‘lodge a complaint’はその限りではない。

‘make a complaint’においては、動詞の構文への意味寄与が極めて軽微なのに対して、‘lodge a complaint’においては、‘lodge’という動詞自体の意味が構文の意味に寄与しており、単に項を共有し‘支持’する以上の意味的役割を果たしている。

日本語では、これが「告訴」(告訴をする) ; 「申し

立て」(申し立てをする) ; 「異議申し立て」(異議申し立てをする) など、典型的な支援動詞構文になる (i.e. 事象名詞が意味的主要部でフレーム想起要素となる)。

一方、‘make a complaint’にあたる表現は、日本語では「いう」という動詞とともに表現され「苦情をいう」「文句をいう」等となる。「いう」という動詞が、明らかに Statement フレームを想起する FBE として機能しており、先にみた典型的な支援動詞構文とは異なる。が、「いう」という動詞とその目的語の名詞句とのコロケーション (例えば「話す」とは結びつかない)、汎用性の高い「いう」という動詞の意味的中立性、参与する事象名詞の構文の意味への寄与、を考慮すると、支援動詞構文の延長線上に捉えられる表現であり、少なくともその動詞と名詞との組み合わせを記述する必要のあるものである。

日本語においても典型的な支援動詞構文に参与する「伝達」フレームの事象名詞が多く存在する。軽動詞をとるものに、上記の「告訴」「申し立て」の他に、「主張」(主張をする ‘make a claim’ ; 「口答え」(口答えをする ‘make a retort’)、 「噂話」(噂話をする) 等、多くある。「いう」をとる他の事象名詞に「嘘」(嘘を言う)があるが、同名詞「嘘」が参与する「嘘をつく」は、事象名詞がFBEとなる典型的な支援動詞構文である。日英語対照を念頭に、これら支援動詞構文の一環として語彙記述・構文記述を行う際、「苦情をいう」「文句をいう」の記述を排除するわけにはいかない (藤井 2005)。

4. なぜ構文的アプローチか

4.1 構文理論における、語彙と構文

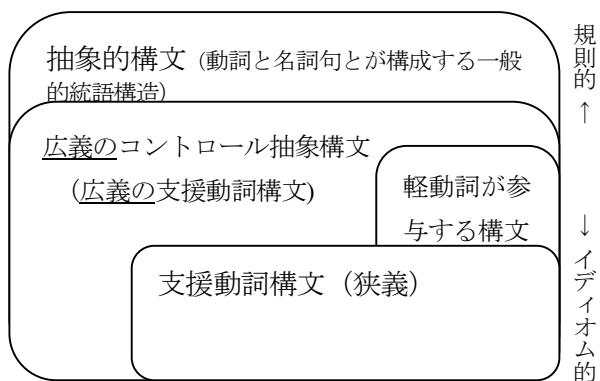
構文理論 (Construction Grammar; Fillmore *et al.* 1988, Kay and Fillmore 1999, Fried, & Östman 2004) における構文 (construction) は、形式と意味との対であり、文法規則を独自の統語的素性と意味的素性の指定をもつ構文 (語彙レベルまたは句レベルの構文、またそれらの統合体) としてとらえる。合成性・非合成性両者を合わせ持つ構文は、参与する語彙によって特徴づけられ、同時に、語彙は参与する構文素性によって特徴づけられる。また、構文は、未指定情報を多くもつ抽象的・一般的な構造から、一部の主幹

部が語彙的に指定され具体的な指定をもつ構造、さらに多くの語彙が充足され具現された構成体 (construct) まで、構文が抽象・具象の階層によって構造づけられている。

構文および語彙を、そのような sign (また sign の統合) として捉えることにより、語彙と語彙との慣習的組み合わせを、それらが共起する構文の特質・指定によって記述することが可能になる。また、構文への参与語彙を記述することにより、具体的な語彙記述を体系的・有機的に行うことができる。

4.2 構文間の関係・抽象的構文との包含関係

3 節でみた支援動詞構文の構文タイプは、以下に図示する構文間の関係で捉えることができ、抽象的構文と具象的構文との間の包含関係で捉えられる。



強い ← 動詞の意味の構文の意味への寄与度 → 弱い

図 1 支援動詞構文の類型と構文間の関係

4.3 支援動詞構文の語彙的特化性

語彙と語彙 (ここでは動詞と名詞) との結びつきが個々の語彙の素性のみでは予測しきれず、参与する構文の指定と共起語彙の記述を必要とする。この語彙的選別性とその記述の必要性は、言語間対照において特に顕著である (本稿 3.3 節の例示参照)。

4.4 構文上のイディオム性と規則性の共存

上垣・藤井(2008)で示すように、支援動詞構文が構文単位において統語的固定性を示す。同時に、規則性も示す。このような構文のイディオム性と規則性の共存を記述することが、構文理論的アプローチで可能である。

5. おわりに

本稿では、支援動詞構文という構文概念を用いて、特定の動詞と特定の名詞との構文上の結びつきを分析・記述する構文理論的アプローチ・枠組みを概説し、その意義を論じた。本ポスター発表においては、本稿で述べた支援動詞構文の特質・類型の概説・提案に加え、この枠組みに添って、コーパスデータに基づく支援動詞構文に参与する具体的な支援動詞と事象名詞の結びつき目録をより詳細に提示する。

【謝辞】

本研究を行う上で、英語における支援構文(support constructions)に関する研究・分析・洞察を御教示くださった Charles J. Fillmore氏、および、Michael Ellsworth氏に深く感謝いたします。本稿には、両氏との議論においてご指摘いただいた知見が含まれます。

【参考文献】

- Danlos, Laurence. 1992. Support verb constructions: linguistic properties, representations, translation. *French Language Studies*. 2, 1-32.
- Fillmore, C. J., P. Kay, and M. C. O'Connor. 1988. Regularity and idiomatity in grammatical constructions: the case of *let alone*. *Language* 64(3):501-538.
- Fillmore, Charles. J. 2002. Varieties of Support Constructions. A plenary lecture given at the Second International Conference on Construction Grammar, Helsinki.
- Fried, Mirjam & Jan-Ola Östman (eds.) 2004. *Construction Grammar in a Cross-Language Perspective*, [Constructional Approaches to Language Series, vol. 2.] Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Kay, P., and C. J. Fillmore. 1999. Grammatical constructions and linguistic generalizations: the *what's x doing y* construction. *Language* 75(1):1-33.
- Ruppenhofer, Josef, Collin F. Baker and Charles J. Fillmore 2002. "Collocational Information in the FrameNet Database". In Braasch, Anna and Claus Povlsen (eds.), *Proceedings of the Tenth Euralex International Congress*. Copenhagen, Denmark. Vol. I, 359-369.
- Ruppenhofer, J., M. Ellsworth, M. R. L. Petruck, C. R. Johnson and J. Scheffczyk. 2006. FrameNet II: Extended Theory and Practice. <http://framenet.icsi.berkeley.edu/book/book.pdf>.
- 池原悟他(1997)『日本語語彙大系』NTTコミュニケーション科学研究所監修 岩波書店。
- 上垣渉・藤井聖子 2008. 「日本語支援動詞構文におけるイディオム性と規則性」『言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集』言語処理学会。
- 荻野孝野, 小林正博, 伊佐原均. 2003. 『日本語動詞の結合価』三省堂
- 藤井聖子 2005. 「日本語フレームネットにおける「伝達」領域での分析」、『日本認知言語学会論文集第5巻』、625-628. 日本認知言語学会
- 村木新次郎. 1991. 『日本語動詞の諸相』。ひつじ書房。